

## セイコーエプソン株式会社

〒392-8502 長野県諏訪市大和3-3-5  
TEL: 0266-52-3131 (代表)

<http://www.epson.jp>

**EPSON**  
EXCEED YOUR VISION

セイコーエプソン株式会社

2008年3月期 **株主通信**  
2007年4月1日～2008年3月31日

### 投資家情報ページのご案内

投資家情報ページに、最新の決算資料や、これまでに発行した株主通信、アニュアルレポートなど、さまざまな情報を掲載しています。このうち「個人投資家の皆様へ」には、株主・個人投資家の皆様向けに、エプソンをさらにご理解いただくためのお役立ち情報を掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



**URL** <http://www.epson.jp/IR/> (投資家情報トップページ)  
<http://www.epson.jp/IR/kojin/> (個人投資家の皆様へ)



この株主通信は、環境に配慮し、「FSC認証紙」を使用しています。



## ごあいさつ

株主の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと拝察申し上げます。また、平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

当期の業績を概観いたしますと、売上高は1兆3,478億41百万円(前期比4.8%減)、営業利益は575億77百万円(同14.4%増)、経常利益は632億63百万円(同28.9%増)、当期純利益は190億93百万円(前期は70億94百万円の当期純損失)となりました。

情報関連機器事業セグメントにおいては、価格低下の影響があるなかで、インクジェットプリンタや液晶プロジェクターの販売数量増加やコストダウンの進展がありました。

電子デバイス事業セグメントにおいては、中・小型液晶ディスプレイ事業でのポートフォリオの転換が計画どおりに進まず、採算改善に大幅な遅れが生じてしまいました。

2009年3月期は、中・小型液晶ディスプレイ事業の構造改革と、プリンタ事業のビジネス・産業領域への取り組み強化を確実に進め、事業基盤を固めるとともに、今後

の中長期的な方向性(次期中長期ビジョン)を明確にしてまいります。

なお、次期中長期ビジョンの方向付けに合わせるかたちで、2008年6月の定時株主総会における取締役改選および取締役会の決議を経て、常務取締役の碓井稔が代表取締役社長に、また私、花岡は代表取締役会長にそれぞれ就任する予定であります。今後は、新社長を中心とする経営体制にて事業運営をおこなってまいります。

今後も、より一層、企業体質を強化し、中長期的な成長を目指して全社一丸となって取り組んでまいりますので、引き続きご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2008年5月

代表取締役社長

花岡 清二

### 経営理念

お客様を大切に、地球を友に、  
個性を尊重し、総合力を発揮して  
世界の人々に信頼され、社会とともに発展する  
開かれた会社でありたい。  
そして社員が自信を持ち、  
常に創造し挑戦していることを誇りとしたい。

(エプソンは経営理念を世界の14の言語に翻訳し、グループ全体で共有しています。)

目次   ごあいさつ.....	01
連結財務ハイライト.....	02
事業の種類別セグメントの概況.....	03
当期の業績と今後の戦略.....	05
<b>特集</b> エプソンの研究開発活動.....	09
環境活動.....	12
グローバル事業展開.....	13
会社情報 / 株式情報.....	14

本文中、セイコーエプソングループにつきましては「エプソン」、セイコーエプソン株式会社につきましては「当社」と記載しています。

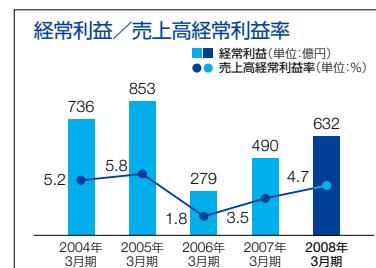
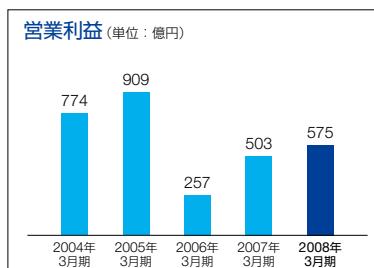
# 連結財務ハイライト

(単位: 億円)

	2004年3月期 (2003年4月1日から 2004年3月31日まで)	2005年3月期 (2004年4月1日から 2005年3月31日まで)	2006年3月期 (2005年4月1日から 2006年3月31日まで)	2007年3月期 (2006年4月1日から 2007年3月31日まで)	2008年3月期 (2007年4月1日から 2008年3月31日まで)
売上高	14,132	14,797	15,495	14,160	<b>13,478</b>
営業利益	774	909	257	503	<b>575</b>
経常利益	736	853	279	490	<b>632</b>
当期純利益 (△損失)	380	556	△ 179	△ 70	<b>190</b>
総資産	12,070	12,982	13,257	12,850	<b>11,391</b>
純資産	4,143	4,728	4,745	4,943	<b>4,714</b>
1株当たりデータ (単位: 円) :					
当期純利益 (△損失)	204.70	283.60	△ 91.24	△ 36.13	<b>97.24</b>
潜在株式調整後当期純利益	204.53	-	-	-	-
純資産	2,110.20	2,408.13	2,416.54	2,395.14	<b>2,277.45</b>

(注) 1. 金額につきましては、記載単位未満を切り捨てています(1株当たりデータを除く)。

2. 会計基準の変更にとまひ、従来の株主資本を純資産としています。なお、2006年3月期までの純資産および1株当たり純資産は、それぞれ従来の算定方法による株主資本および1株当たり株主資本を表示しています。



(注) 1. 売上高経常利益率は、経常利益を売上高で割って算出しています。

2. 自己資本は、純資産から少数株主持分を差し引いて算出しています。

# 事業の種類別セグメントの概況

2008年3月期の業績の詳細については、同封の「第66回定時株主総会招集ご通知」内、事業報告をご確認ください。

売上高構成比(2008年3月期)\*

売上高(単位:億円)

営業利益(△損失)(単位:億円)

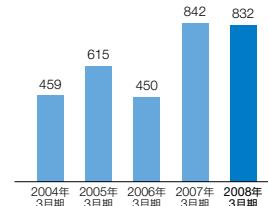
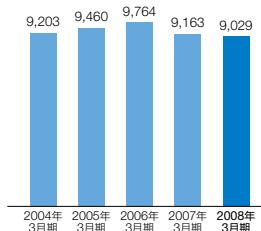
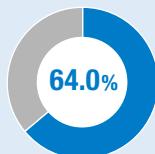
## 情報関連機器



フォト複合機  
マルチフォトカラリオ  
「PM-A840」



DVD一体型ホームプロジェクター  
ドリームオ「EMP-DM1」



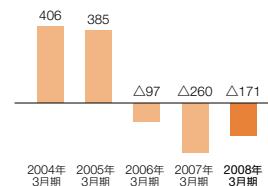
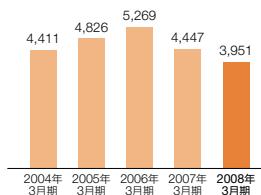
## 電子デバイス



カーナビゲーション向け  
高精度ジャイロセンサ  
「XV-8000LK」



組み込みアプリケーション向け  
音声ガイド・オーディオデコードLSI  
「S1V3033x」シリーズ



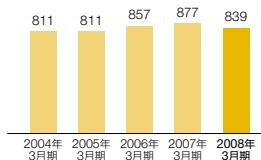
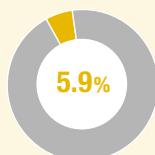
## 精密機器



グランドセイコー スプリング  
ドライブクロノグラフモデル  
「SBGC003」



高速・高精度  
新スカラロボット  
「Gシリーズ」



## その他



エプソンイノベーションセンター



\* 売上高構成比は、内部売上高を含めて算出。

## 事業内容

- プリンタ事業（インクジェットプリンタ、ページプリンタ、ドットマトリクスプリンタ、大判インクジェットプリンタおよびそれらの消耗品、カラーイメージスキャナ、ミニプリンタ、POSシステム関連製品など）
  - 映像機器事業（液晶プロジェクター、液晶モニター、ラベルライターなど）
  - その他（PCなど）
- 
- ディスプレイ事業（中・小型液晶ディスプレイ、液晶プロジェクター用高温ポリシリコンTFT液晶パネルなど）
  - 水晶デバイス事業（水晶振動子、水晶発振器、オプトデバイスなど）
  - 半導体事業（CMOS LSIなど）

- ウォッチ事業（ウォッチ、ウォッチムーブメントなど）
- 光学事業（プラスチック眼鏡レンズなど）
- FA機器事業（水平多関節型ロボット、ICハンドラ、工業用インクジェット装置など）

- 胎内育成事業
- グループ内サービス業 など

## 2008年3月期の主な新商品、開発状況

- プリンタ事業では、おうちプリントに役立つ機能を搭載したモデルや、ビジネスシーンでの使用に適したモノクロ高速プリントモデルなど、使用シーンに合わせて選べる幅広いラインナップのインクジェットプリンタを発売。
  - 映像機器事業では、フルハイビジョンパネル搭載の本格シアターモデルや、軽量で簡単に持ち運びのできるDVD一体型モデルなど、さまざまなニーズに応えるホームプロジェクターを発売。
- 
- 水晶デバイス事業では、近年急拡大するGPS市場向けの高機能・高精度デバイスのラインナップのひとつとして、傾斜したダッシュボードへの取り付けに対応した、カーナビゲーション向けジャイロセンサを商品化。
  - 半導体事業では、家電、住宅設備など、音声ガイドを必要とするシステムに幅広く搭載可能な、組み込みアプリケーション向けの音声ガイドLSIを開発。

- FA機器事業では、独自のスマートモーションコントロール技術\*により、業界トップクラスの高速・高精度・低振動を実現し、さまざまな装置の仕様にも対応した新スカラロボットを発売。

\* スマートモーションコントロール技術：高速・低振動の両立に加え、直線・円弧動作や重量物を持った時の動作などを最適化した、エプソン独自のロボット制御技術。

- 胎内育成事業では、新規事業化を目指したさまざまな事業の育成および研究開発を実施。このうち「エプソンイノベーションセンター」では、次世代情報関連機器の研究開発を担当。
- グループ内サービス業では、エプソン向けに各種サービス事業を子会社で展開。

## 当期の業績と今後の戦略

### 当期の業績について

エプソンは当期、次の2点に重点的に取り組みました。

まず1点目として、インクジェットプリンタの本体販売数量を再度拡大させる方向に転換しました。同事業は2006年3月期の採算悪化を受けて、前期を体力づくりの年と位置付け、コストダウンや固定費削減を進めながら、プリントボリュームの少ない機種の本体販売数量を絞り込む施策を展開し、採算改善という成果を残すことができました。この成果をもとに当期は、短期的な収益と中期的な成長の双方を見据えたバランスある戦略に取り組み、将来のインクカートリッジの売上高成長を意識した、積極的な本体の販売をおこないました。

2点目として、採算が大幅に悪化した中・小型液晶ディスプレイ事業の構造改革に取り組みました。同事業は、前期中に減損処理を実施したことにより、当期は固定費負担が軽くなった状態からスタートしました。各テクノロジーについては、カラー STN のオペレーションを海外へ移管し、MD-TFD の事業を終結することによって、アモルファスシリコン TFT と低温ポリシリコン TFT にリソースを集中するという方向性を定め、それにともない生産体制の見直しをおこないました。そのうえで、堅調な携帯電話の需要を確実に取り込みつつ、高精細な表示など、エプソンの強みを活かせる新規アプリケーションを開拓し、売上を確保することによる採算改善を目指しました。

以上の取り組みにより、当期は会社全体としては前期

実績を上回る利益を達成できましたが、その内容は期初計画とは大きく異なる結果となりました。情報関連機器事業セグメントは計画を上回ったものの、電子デバイス事業セグメントのうち、特に中・小型液晶ディスプレイ事業においては採算改善に大幅な遅れが生じ、前期からの課題が積み残しとなりました。

### 当期の業績サマリー

#### 情報関連機器事業セグメント

##### インクジェットプリンタの本体販売数量を再度拡大

- 短期的な収益と中期的な成長の双方を見据えたバランスある戦略
- 将来のインクカートリッジの売上高成長を意識した、積極的な本体の販売

↓

**本体の販売数量増加とともに、  
計画を上回る利益を達成**

#### 電子デバイス事業セグメント

##### 中・小型液晶ディスプレイ事業の構造改革

- テクノロジーごとの方向性見直しにともない、生産体制も見直し
- 強みを活かせる新規アプリケーションを開拓し、売上確保による採算改善

↓

**新規アプリケーションの開拓が進まず、  
採算改善に大幅な遅れ**

## 情報関連機器事業セグメントの 成果について

インクジェットプリンタ事業については、市場全体が大きくは伸びない状況のなか、本体の販売数量拡大によって一定の数量増加を達成し、市場でのポジションを回復することができました。これにより、将来のインクカートリッジの販売増加への効果が期待できます。また、地域・顧客ごとにターゲットを明確にしたきめ細かなマーケティングを実施して、効率的な費用の執行をしたことや、継続的なコストダウンなどによって、事業体質の強化を進めました。特に、年末商戦に向けて市場に投入した新商品については、印刷スピードを上げたことによる商品力の向上や、マルチファンクションプリンタ(複合機)のラインナップの充実などにより、数量を増加させることができました。

採算面では、円安による効果以外にも、プラットフォームの共通化をはじめとするコストダウンの進捗や、消耗品の販売が堅調に推移したことにより、ほぼ計画どおり推移しました。

そのほか、教育用途の堅調な需要によって、ビジネス向けの液晶プロジェクターの数量が大幅に増加し、POSシステム関連製品が堅調に推移しました。

## 中・小型液晶ディスプレイ事業の 追加施策について

中・小型液晶ディスプレイ事業の採算改善に大幅な遅れが生じた理由は、採算の良い新規アプリケーションの獲得によるポートフォリオの転換が進まず、売上高が大きく減少したことによるものです。特に、期初計画に対して進捗が大幅に遅れたため、前提となっていた固定費をカバーするだけの売上高を確保することができませんでした。要因をアプリケーション別に見ていくと、まず、携帯電話向けについては、事業終結予定のMD-TFDからアモルファスシリコンTFTへの転換による一定の数量と売上高の確保を前提としていましたが、MD-TFDは計画どおりに減少した一方で、アモルファスシリコンTFTは計画に対して未達となり、転換が大幅に遅れました。また、新規アプリケーションの需要取り込みに関しても、高精細な表示など、エプソンが強みとする分野の需要が予想していたよりも拡大しませんでした。上半期から下半期にかけては、ハイエンドのスマートフォンやマルチメディア携帯機器など、携帯電話以外のアプリケーションが増加してきましたが、それでも十分な売上を確保するには至らず、追加施策を講じることとしました。

まずMD-TFDは、当期中に生産を終了しました。カラーSTNは、計画どおり海外にオペレーションを移管しましたが、ローエンドの携帯電話市場における競争激化により、採算的にも厳しい状況が続いています。このため2009年3月期中に生産を大幅に縮小し、ラインの一部を、需要が高まっているタッチパネルの製造に転換します。これによって、アモルファスシリコンTFTと低温ポリシリコンTFTへのリソース集中を加速し、そのうえで適正な生産規模への再編をおこないます。具体的には、国内・海外の生産拠点を大幅にスリム化します。これに合わせて、人員は、グループ内の成長分野への転換などを進めます。

2009年3月期は、当期に比べて損失額は減少しますが、事業構造の転換が遅れていることと、改革の過渡期

であり、成果が十分に出てこないことから、依然として厳しい採算状況が続くものと予想されます。今後も、新規アプリケーションの比率を高めてポートフォリオの転換を進めるとともに、引き続き収益回復に取り組んでいきます。

## 2009年3月期の経営戦略について

2009年3月期は、情報関連機器事業セグメントを中心に事業基盤の強化に取り組むと同時に、中・小型液晶ディスプレイ事業の構造改革を進め、中期的な利益成長に向けた事業基盤を固めます。

インクジェットプリンタ事業では、競争力の高い商品の投入と、プリントボリュームの拡大を意識したマーケティングにより、引き続き販売数量の増加を目指します。これ

### 中・小型液晶ディスプレイ事業の方向性



に加えて、ビジネス・産業領域への取り組みを強化します。この一環として、ノーリツ鋼機株式会社と包括的に業務提携をおこなうこととしました。この提携により、従来のミニラボに関する協業に加え、産業用印刷機器の分野においても共同開発・相互開発委託などの協業を進めます。

さらに、安定して利益貢献している次の3事業では、継続して高い利益を確保し、グループ全体の収益基盤の下支えをしていきます。

まず、ビジネスシステム事業(ドットマトリクスプリンタ、POSシステム関連製品など)では、入札案件の獲得、顧客ニーズの拾い上げ・ソリューション提案などで安定的な事業を展開します。

液晶プロジェクター事業では、引き続き堅調な推移が予想される教育用途を中心に、数量成長を目指します。

水晶デバイス事業では、小型・高精度化の需要への対応を進め、拡大する需要を取り込んでいきます。

## マネジメント体制の変更について

エプソンは、中期経営計画「創造と挑戦1000」に基づき、2009年3月期の経常利益1,000億円以上を目指して、業績の回復と再成長のための各施策を推進してきました。2009年3月期は、中・小型液晶ディスプレイ事業で損失を計上することなどにより、誠に遺憾ながら、この目標値には届かない見込みです。しかし、中期的な成長という点では、インクジェットプリンタ事業でビジネス・産業

領域への事業拡大の足がかりを築き、電子デバイス事業で今後の事業展開の方向を定めるなど、一定の方向付けをすることができました。今後は、この成果をもとに、情報関連機器事業を中心とした次期中長期ビジョンの策定を進めます。

エプソンでは、2008年6月25日開催予定の定時株主総会および取締役会の決議により、常務取締役の碓井稔が代表取締役社長に、代表取締役社長の花岡清二が代表取締役会長に就任する予定です。これは、中期経営計画の最終年度である2009年3月期において、改革の成果をより磐石なものにすると同時に、中期的な成長につながる新規事業領域の開拓や新商品の創出に向けた次期中長期ビジョンを新たな視点でまとめ、新社長のリーダーシップによりその実現を図るためです。新社長候補の碓井は、「マイクロピエゾテクノロジー」の開発に初期段階から携わるなど、これまでの成長の原動力になるとともに、次期中長期ビジョン策定の取りまとめなど、経営の中枢を担ってきました。今後、新たな体制のもとで中長期的な成長を目指し、より一層、企業体質を強化していきます。

## 特集：エプソンの研究開発活動



エプソンイノベーションセンター  
(次世代情報関連機器の研究開発拠点)

### エプソンのコア技術と中期研究開発方針

エプソンはこれまで、技術の力で魅力ある世界を切り開くため、「創造と挑戦」を繰り返し、ミニプリンタ、クォーツウォッチなど、数多くの世界初の商品を開発してきました。これらの商品化の過程で、精密かつ低消費電力の要素部品を独自に開発したことにより、現在のエプソンを支えるコア技術である、微細加工技術(Compact)、「省」の技術(Energy Saving)が培われました。その後、これらの技術をベースとして、インクジェットプリンタ、液晶プロジェクター、ディスプレイ、半導体などの事業が発展していきなで、もうひとつのコア技術である、イメージング技術(Fine Image)が培われました。

エプソンでは、中期的な研究開発の方針として、これら3つのコア技術(Compact/ Energy Saving/ Fine Image)をさらに先鋭化し、お客様の利便性と夢の実現に寄与することを目指しています。この実現にあたり、既存事業においては、コア技術によって進化・発展した「マイクロピエゾテクノロジー」、「3LCD方式\*」などの差別化技術を磨き上げ、競争力のある商品づくりをしていきます。また同時に、新事業領域、新商品群の研究開発も進め、将来の収益貢献を目指した長期的視野での取り組みもおこないます。

\* 3枚の高温ポリシリコンTFT液晶パネルを使って映像を写す液晶プロジェクターの方式。少ない消費電力で、明るく、目に優しい映像を写し出せるという特長がある。



## 既存事業における差別化技術の磨き上げ —新世代高速ヘッド搭載 大判インクジェット プリンタを商品化—

新世代高速ヘッド MicroPiezo TFヘッドを開発し、これを搭載した、64インチ対応大判インクジェットプリンタ マックスアートK3 (VM) シリーズ「PX-20000」を発売しました。

### ■ MicroPiezo TFヘッドとは

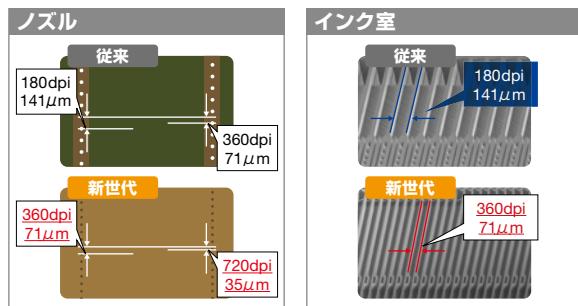
マイクロピエゾヘッドは、ピエゾという圧電素子を伸縮し、その物理的な圧力でインクを吐出する、エプソンが独自に開発したインクジェットヘッドです。カラリオやマックスアートなどのブランドで販売されている商品は、高画質・高耐久などの特長を持った、このヘッドを搭載しています。

エプソンでは現在、高い市場成長が見込まれるビジネス・産業領域での取り組みを強化しており、そのベースとなる技術として、新世代高速ヘッド MicroPiezo TFヘッ

ドを開発しました。MicroPiezo TFヘッドでは、従来の特長そのままに、集積度が従来比2倍となる高密度化ノズルによって、インク滴の吐出速度や着弾位置の精度が向上し、より高速な印刷ができるようになりました。

### ■ MicroPiezo TFヘッドを搭載した「PX-20000」

マックスアートK3 (VM) シリーズ「PX-20000」は、MicroPiezo TFヘッドを初めて搭載した商品です。これまでエプソンのインクジェットプリンタは、高画質が求められるグラフィック印刷において高い評価をいただきました。一方、大判インクジェットプリンタの市場は、ビジネス・産業向けといった新しい領域での需要拡大が見込まれています。この領域では、短納期の印刷にも対応できる高速のプリンタが求められています。MicroPiezo TFヘッドを搭載した「PX-20000」は、ビジネス・産業領域にも適した、高速印刷と高画質を両立したモデルです。



従来のマイクロピエゾヘッドとの密度比較



マックスアートK3 (VM) シリーズ  
「PX-20000」

## ■ MicroPiezo TFヘッドの今後の展開

エプソンでは、MicroPiezo TFヘッドをインクジェットプリンタ事業における中核技術のひとつとして位置付け、ビジネス・産業領域を中心に幅広く展開していく予定です。

## 長期的視野での新事業領域の研究開発 －「究極の黒」と長寿命を実現した 有機ELシステム－

高度な画像表現による「究極の黒」と長寿命を実現した有機ELシステムを開発し、実用化に向けて、小規模量産対応が可能な開発製造ラインを稼働しました。

## ■ 有機ELディスプレイとは

液晶テレビなどに使われている液晶ディスプレイは、光源から発せられた光を遮ったり、透過させたりすることによって画像を表示しています。それに対し、有機ELディスプレイは、電圧をかけると発光する有機材料を利用し、電流が流れる際に光を放射することで画像を表示します。自発光であるため高コントラスト、広視野角、高速応答という特長があり、さらに薄型・軽量化が可能であることから、次世代ディスプレイとして注目を集め、多くの企業が研究開発を手がけています。

## ■ 「究極の黒」と長寿命を実現した有機ELシステム

エプソンは、有機ELディスプレイの画質面での競争力を高めるため、画質を左右する「黒」に徹底的にこだわり、

従来のディスプレイにはない高度な画像表現を可能にしました。また、有機ELディスプレイ実用化の最大の課題とされてきた寿命については、発光材料の改善と独自の素子構造の開発によって初期段階の輝度劣化を防ぐことで、実用化レベルである寿命50,000時間\*以上を達成しました。

\* 輝度半減までの時間



開発した有機ELシステム

## ■ 有機ELシステムの今後の展開

エプソンでは、今回開発した有機ELシステムの用途として、車のインストルメントパネルや店舗展示用のディスプレイなど、高い質感が求められる幅広いアプリケーションを想定しており、今後さらに取り組みを加速していきます。



有機ELシステムの今後の展開イメージ

## 環境活動

### 「オゾン層保護・地球温暖化防止大賞」の「ベスト・オブ・ベスト」を受賞

日刊工業新聞社が主催する「オゾン層保護・地球温暖化防止大賞」の「ベスト・オブ・ベスト」を受賞しました。この賞は、「オゾン層保護・地球温暖化防止大賞」の創設10周年を記念し、過去10年の「経済産業大臣賞」、「環境大臣賞」受賞者のなかから、最も貢献が認められる企業や団体を顕彰するものです。

エプソンでは、1988年に業界に先駆けてフロンレス活動を開始し、1992年にフロンレスを達成しました。こうした取り組みにより、1998年に「第1回通商産業大臣賞\*」を受賞しました。さらに2006年には、「インクジェット工業応用技術の実用化」、「地球温暖化物質排出量の削減活動」など、代替フロンの削減を目指した生産技術開発や、オゾン層破壊物質に対する取り組みが評価され、「第9回環境大臣賞」を受賞しました。

こうした長期にわたる取り組みが高く評価されたことを真摯に受け止め、引き続き高い目標の環境保全に積極的に取り組んでいきます。

\* 現在の名称は経済産業大臣賞



授与された賞状

### エプソンのグローバル環境会議でカーボンオフセットを実施

エプソンでは毎年、国内・海外の各拠点から責任者または環境活動推進責任者が参加して、環境施策推進のための重要事項を審議し、方向付けをおこなうためのグローバル環境会議を開催しています。2007年12月には、長野県諏訪市の本社で、「将来を見据えたエプソンの環境活動のあり方」をテーマとした会議を開催しました。

今回は、会議の運営も環境配慮型にすべく、海外からの参加者の航空機利用による二酸化炭素排出量を、グリーン電力購入によってカーボンオフセット\*1する、初の試みを実施しました。今回の二酸化炭素排出量は約37トンで、これを、日本自然エネルギー株式会社から、バイオマス発電による6.7万kWhのグリーン電力証書を購入するかたちで相殺しました\*2。

エプソンでは今後も、企業活動のあらゆる場面での環境負荷低減について、このようなカーボンオフセットによる手法に限らず、より効果的な方法を模索しながら着実に取り組んでいきます。

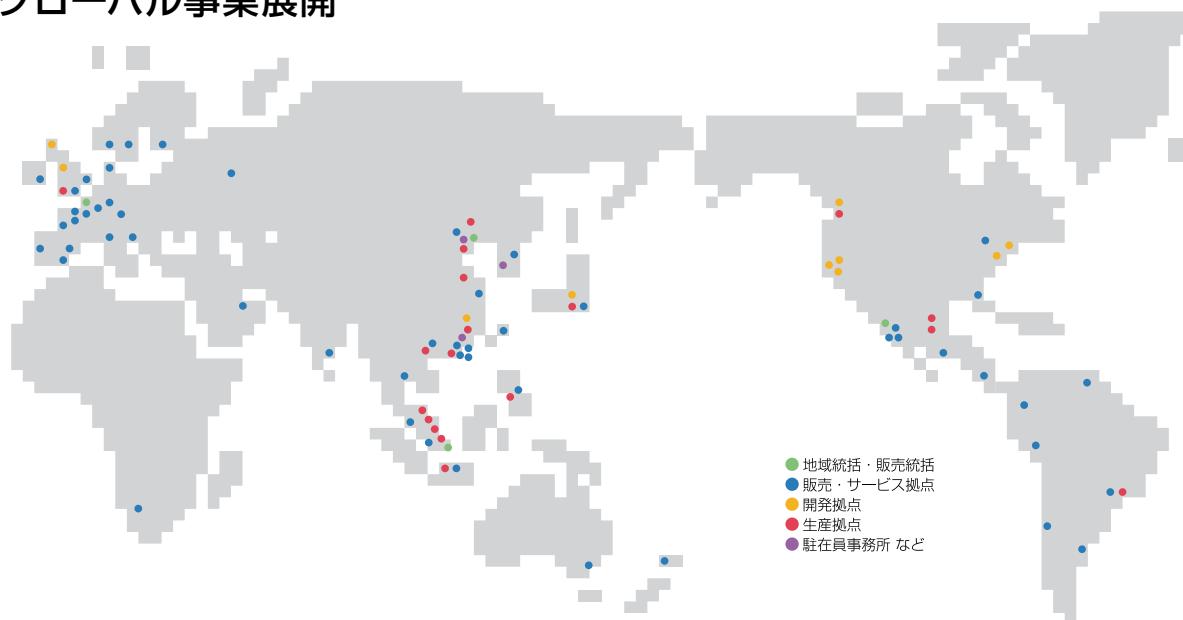


グリーンパワーマーク

\*1 カーボンオフセット：事業活動などで排出した二酸化炭素を、植林やバイオエネルギーの開発といったオフセット事業に相応分の金額を寄付するなどして、排出量の相殺をすること。

\*2 二酸化炭素排出量は、環境省「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令で定める排出係数一覧」より算出。バイオマス発電6.7万kWhによる二酸化炭素削減効果は、海外からの航空機利用による二酸化炭素排出量約37トンに相当。

# グローバル事業展開



## ■ 本社および主な事業所

本社	千歳事業所
本店	富士見事業所
広丘事業所	酒田事業所
松本南事業所	日野事業所
島内事業所	塩尻事業所
諏訪南事業所	松島事業所

## ■ 国内関係会社 26社

エプソン販売株式会社  
 エプソンドイレクト株式会社  
 東北エプソン株式会社  
 エプソンイメージングデバイス株式会社  
 エプソントヨコム株式会社  
 オリエント時計株式会社  
 他 20社

## ■ 海外関係会社 82社

### 統括会社

U.S. Epson, Inc. (地域統括)  
 Epson Europe B.V. (地域統括)  
 Epson (China) Co., Ltd. (地域統括)  
 Epson Singapore Pte. Ltd. (地域販売統括)

### 販売拠点

Epson America, Inc.  
 Epson (U.K.) Ltd.  
 Epson (Shanghai) Information Equipment Co, Ltd.

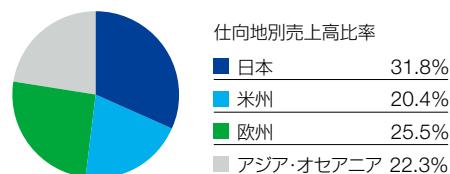
### 生産・開発拠点

Suzhou Epson Co., Ltd.  
 Epson Precision (Hong Kong) Ltd.  
 Epson Imaging Devices (H.K.) Ltd.  
 P.T. Indonesia Epson Industry  
 他 71社

(2008年3月31日現在)

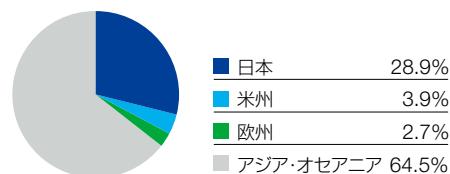
## ■ 連結売上高に占める海外売上高の割合

(2007年4月～2008年3月の12ヵ月通算)



## ■ 所在地別従業員数の割合

(2008年3月31日現在)



## 会社情報

- **本社** 〒392-8502 長野県諏訪市大和三丁目3番5号  
TEL: 0266-52-3131 (代表)
- **本店** 〒163-0811 東京都新宿区西新宿二丁目4番1号  
新宿NSビル  
TEL: 03-3348-8531 (代表)
- **資本金** 532億4百万円
- **創立** 1942年5月18日
- **従業員数** (2008年3月31日現在)  
連 結: 88,925人  
単 体: 13,000人
- **グループ会社数** (2008年3月31日現在)  
109社 (当社を含む)  
国 内: 27社  
海 外: 82社

### ■ 役員一覧 (2008年3月31日現在)

<取締役ならびに監査役>		<業務執行役員>	
取締役会長	草間 三郎	業務執行役員常務	矢島 虎雄
取締役副会長	服部 靖夫		John Lang
取締役社長 (代表取締役)	花岡 清二		平野 精一
			上柳 雅善
取締役副社長 (代表取締役)	丹羽 憲夫		小口 徹
専務取締役	両角 正幸	業務執行役員	内田 健治
常務取締役	大月 康正		濱 典幸
	久保田 健二		有賀 修二
	小松 宏		牛島 升
	碓井 稔		丸山 三明
常勤監査役	木代 俊彦		伊藤 一紀
	真道 昌良		宮澤 要
監査役	山本 恵朗		森 昭雄
	秋山 富一		酒井 明彦
	石川 達紘		小池 清文

## 株式情報

### ■ 株式の状況 (2008年3月31日現在)

発行可能株式総数	607,458,368株
発行済株式総数	196,364,592株
株主の総数	32,016人

### ■ 大株主の状況 (2008年3月31日現在)

株主名	所有株式数 (千株)	所有比率 (%)
青山企業株式会社	20,318	10.34
三光起業株式会社	14,288	7.27
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー	14,068	7.16
服部 靖夫	7,247	3.69
服部 禮次郎	7,060	3.59
第一生命保険相互会社	6,240	3.17
セイコーホールディングス株式会社	6,145	3.12

(注) 1. 所有株式数は千株未満を切り捨てています。  
2. 所有比率は小数点以下第3位を切り捨てています。

### ■ 株主メモ (2008年3月31日現在)

決算期	3月31日
定時株主総会	6月中
期末配当金支払株主確定日	3月31日
中間配当金支払株主確定日	9月30日
株主名簿管理人	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
同事務取扱場所	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部 0120-288-324 (フリーダイヤル) <a href="http://www.mizuho-tb.co.jp/daikou/">http://www.mizuho-tb.co.jp/daikou/</a>
同取次所	みずほ信託銀行株式会社 全国各支店 みずほインバスターズ証券株式会社 本店および全国各支店
公告掲載方法	電子公告によりおこなう。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載しておこなう。 公告掲載アドレス <a href="http://www.aspir.co.jp/koukoku/6724/6724.html">http://www.aspir.co.jp/koukoku/6724/6724.html</a>